



野田建築会会報 2010 秋号

NAA NEWSLETTER 10 AUTUMN

**VOL.24**

Since 1998.  
The Alumni Association of Tokyo  
NODA ARCHITECTURAL ASSOCIATION.  
University of Science

# 第7回野田建築会総会の報告

会長 菊地 利武 (1971年卒)



7回目の総会が会則に規定されている「総会員の1/30以上(出席者+委任状=181名以上)」の参加を得て、平成22年5月29日(土)16時より、神楽坂の理窓会館4階第3会議室で開催されました。

総会では、第1号～第4号議案「事業、会報、名簿および情報部会平成20年度、21年度の活動報告と平成22年度、23年度の活動計画(案)」について審議し了承されました。

第5号議案「平成20年度、平成21年度決算報告・監査報告および平成22年度、平成23年度予算(案)」について審議し了承されました。

第6号議案「会則第3章総会第9条(臨時総会)および第10条(成立)の改正」について審議し、臨時総会の開催に必要な請求数を「1/60以上」から「1/90以上」に、総会成立に必要な定数を「1/30以上」から「1/60以上」に改正することが了承されました。

第7号議案「任期満了に伴う役員改選」について審議し、以下の役員が選出・信任されました。

## 野田建築会 第7期役員 (2010～2011年度)

- 会長：菊地利武 (1971年卒)
- 副会長：五十嵐洋也 (1978年卒)
- 会計委員：齊藤喬 (1970年卒)、熊井和雄 (1979年卒)
- 会計監査：鈴木治文 (1972年卒)、森下誠 (1974年卒)
- 事務局長：瀬沼央 (1978年卒)
- 連絡委員：衣笠秀行 (1985年卒)、中畑昌之 (2004年卒)、小林謙介 (2001年卒)
- 事業部会：五十嵐洋也 (兼務)、高安重一 (1989年卒)
- 会報部会：千葉利宏 (1984年卒) 他
- 名簿部会：山田哲也 (1984年卒)、涌井栄治 (1985年卒)
- 情報部会：高安重一 (兼務)

また、総会では以下の課題について意見交換が行われました。

現在、情報交換・交流の重要なツールとして野田建築会 Web が運用されています。アクセス権は野田建築会の会員および現役生に限定されていますが Web の広がりを図り、利用価値を高めるには対象をオープンにすることが必要との意見もあります。より良い方向性を見出すために、運用方法について継続的に検討することが合意されました。

会則では、東京理科大学学部卒業生以外の理工学研究科建築学科専攻修了生も会員と規程されています。しかしながら連絡先の情報入手等が困難なことから、会員として名簿データに登録されておらず対応ができていないのが現状です。こうした卒業生の扱いをどうするのか課題となっています。また、会則については、記述内容が分かりにくいとの指摘もあり、継続的に会員区分・資格を含め見直し作業を行うことが合意されました。

総会終了後、同じ会場で懇親会を行い、お世辞にも参加者は多いとはいえませんでした。家族的な雰囲気の中楽しい語り合いができたように思います。なお、懇親会には、工学部建築学科同窓会組織の築理会から三輪副会長にご出席いただき、ご挨拶をしていただくとともに交流を深めることができました。

## ◆ 会計報告 齋藤 喬 (1970年卒)

第7回総会で承認されました平成20年度、同21年度決算及び平成22年度、同23年度予算は次のとおりです。

第6回総会では、同窓会運営が赤字に陥っていることを報告しましたが、平成20年度から新規卒業生に対し卒業時に年会費納入の働きかけをおこなったことにより、赤字運営から脱することが出来ました。しかし、依然、既卒業生からの会費納入は年々減少しています。

### < 決算 >

	平成20年度		平成21年度	
前期繰越金	1,807,734		2,145,767	
1. 収入	859,823		960,101	
年会費	138人	414,000	183人	549,000
H19年度卒業生年会費	141人	423,000	136人	408,000
その他(利息等)	22,823		3,101	
2. 支出	521,790		819,215	
一般経費	521,790		819,215	
3. 次期繰越金	338,033		140,886	
当期残高	2,145,767		2,286,653	

### < 予算 >

	平成22年度		平成23年度	
前期繰越金	2,286,653		2,336,653	
1. 収入	900,000		900,000	
年会費	185人	555,000	185人	555,000
H19年度卒業生年会費	115人	345,000	115人	345,000
2. 支出	850,000		850,000	
情報部会	216,000		216,000	
会報部会	564,000		564,000	
事業部会	60,000		60,000	
名簿部会、会計部会	10,000		10,000	
3. 次期繰越金	50,000		50,000	
当期残高	2,336,653		2,386,653	

## 築理会の総会に野田建築会から2人が出席

東京理科大学工学部建築学科同窓会「築理会」の2010年度総会が5月22日、東京・神楽坂の校舎で開催され、野田建築会から五十嵐洋也副会長と会報部会の千葉利宏が出席しました。懇親会の席で会員の皆様に野田建築会を紹介していただき、野田建築会会報の最新号を配布して交流を深めました。

築理会は、石神一郎会長(1970卒、東京理科大学建築顧問、元法務省)を中心に、副会長に林孝夫氏(1969卒、東急建設常務執行役員)、乙丸勝範氏(1971卒、大和ハウス工業顧問)、渡辺一男氏(1972卒、大林組購買部)、三輪富成氏(1973卒、三誠社長)ら多士済々の方々と運営されています。理科大全体の同窓会組織「理窓会」の常任幹事に、築理会から福田義克氏(1968年卒、野村不動産技師)が選任されています。懇親会では、今年6月に長谷工コーポレーション社長に大栗育夫氏(1974卒)が就任するなどの話題で盛り上がりしました。

築理会のホームページ(<http://www.chikurikai.org>)に、年2回発行の会報「a.b.c.」がPDFファイルで掲載されていますので、ぜひご覧ください。ちなみに築理会会報の編集長は、日経ホームビルダー編集長の安達功氏(1986卒)。委員に日経アーキテクチャ副編集長の森清氏(1985卒)がいらっしやいます。

## 吉澤研究室—光環境・照明環境—が始動しました

2010年4月に吉澤望准教授が着任し、学部生15人とともに吉澤研が発足しました。吉澤先生から研究室の紹介をいただきました。

吉澤 望 (よしざわ のぞむ)

1969年 東京都生まれ

1993年 東京大学工学部建築学科卒

1998年 東京大学大学院工学系研究科建築学  
専攻博士課程終了、博士(工学)

2002年 東京理科大学理工学部建築学科助手

2006年 関東学院大学人間環境学部人間環境  
デザイン学科専任講師

2009年 同准教授

2010年 東京理科大学理工学部建築学科准教授



私は以前に4年間東京理科大学理工学部建築学科で助手を勤めた後、他大学に講師として赴任しておりましたが、この2010年4月から再び東京理科大学理工学部建築学科に戻って参りました。専門は建築の光・照明環境です。すでに過ごしたところのあるキャンパスでありますし、また先生方や助教・職員の皆さんなどのバックアップもいただくことができ、お陰様で今のところスムーズに研究室を立ち上げることができつつあるかなと考えています。学生に対する接し方は助手時代とそれ程変わらぬつもりなのですが、学生の方からは以前よりも少し遠慮がちに接しられているような感もあり、これは単に私が年を取ったということなのかもしれませんし、あるいは学生は意外と肩書き重視なのか?と考えたりしています。

今年から学生と共に進めている研究テーマとしては、国立西洋美術館における昼光照明復元に関する検討、年間視環境評価手法の開発、光源と物体の分光特性を考慮した照明計算手法の開発、照明の認識と明るさ感評価に関する研究、テクスチャ・エッジ知覚の指標化に関する研究、遺伝的アルゴリズムに基づく建築・照明デザイン手法の確立、業務用建築物における照明エネルギー削減手法に関する調査といったものがあります。ざっと分類するとすれば、建築空間における光や照明をどのように捉えていけば良いのかといった知覚心理学的視点からのテーマ、照明シミュレーションなどのツールを実際的设计で活かしていくことを追求するテーマ、さらにそれらの研究成果をもとに実

### 川向教授が「小布施まちづくりの奇跡」を出版

川向正人教授が2010年3月に新潮新書から「小布施まちづくりの奇跡」(価格720円)を出版しました。川向先生は1994年に着任し、2005年に長野県小布施町に東京理科大学・小布施まちづくり研究所を開設。住民と地方自治体が進めるまちづくりに、大学と学生たちが積極的に関わるという前例のない取り組みを進めています。新書では年間120万人もの観光客が訪れる小布施町が取り組んできた修景事業と呼ばれるまちづくりの歴史を振り返るとともに、まちづくり研究所の5年間の成果も紹介。専門知識のない一般読者にも読みやすい本となっています。ぜひ、ご覧ください。

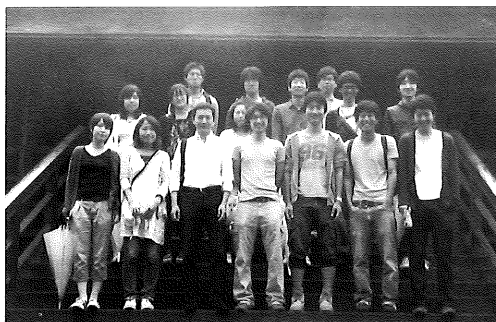
まちづくり研究所は小布施町役場の2階、町長室と同じフロアに設置され、勝亦達夫氏(川向研博士課程在籍、2004年卒)の他、卒論生・修論生数人が常駐しています。室内には活動の様子をパネル展示して自由に閲覧できるようになっており、情報発信拠点の役割も担っています。

2008年度から小布施まちづくり大学を開校して年5~6回の

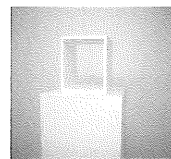
際の空間における照明計画を検討していくテーマに分けることができます。

野田の建築学科の良いところは、やはり何よりも自由で風通しの良いところではないでしょうか。放っておくと無駄な会議や雑用が増えていく大学組織の中で、このことを保っていくにはこれまでも多大な努力が為されてきているのだと思いますが、この点はぜひ受け継いでいきたいと考えています。それから学生の質が非常に高い点も挙げておかなければいけません、この学科では教育と研究が乖離しない、つまり教員が最先端の研究を面白がって進めていけば、学生は興味を持って付いてきてくれるし、それが自然に教育になるだろうとある意味楽観的に構えています。実際に初年度から研究室に入ってきてくれた学生はいずれも真面目でまた積極的な良い人材が揃っています。

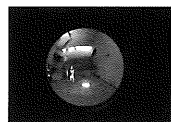
今後に向けては、照明教育という点で徐々に特色を出していきたいとか、少し腰を据えて5年先ぐらいを見越した研究テーマを組み直したいとか、いろいろと考えていることはありますが、とりあえず、むき出しの蛍光灯が時々古くなってちらついているような研究室の侘びしい照明環境を、今年度中にまずは何とかしたいところです。



セミ合宿集合写真



実験用模型



美術館測定



実験用模型制作中

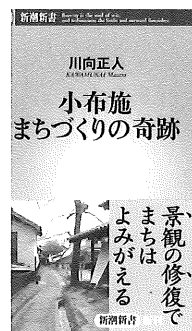


研究室内

オープンレクチャーの他、小、中学生を対象としたワークショップなども実施。毎年11月に「小布施まちづくりシンポジウム」を開催しており、今年は11月20日(土)に国土交通省都市・地域整備局街路交通施設課長の松井直人氏を招いて「国道403号を考える~車から人へ」をテーマに行われます。詳しい問い合わせは、研究所のホームページから(<http://www.machizukuri-lab.com/>)。



東京理科大学・小布施まちづくり研究所  
(10月8日千葉撮影)



## 2010年度新任の助教3氏を紹介します

### 情報から建築を考える

遠田 敦 (えんた あつし)

1980年 埼玉県越谷市生まれ  
2003年 早稲田大学理工学部建築学科卒業  
(渡辺仁史研究室)。博士(建築学)  
2007~2009年 同理工学研究所助手  
2009年~同人間科学学術院 e-school 教育コーチ  
2009年~日本建築学会情報システム委員会建築  
性能モニタリング小委員会委員。  
2010年~大宮研究室助教。



みなさまはじめまして。出身は早稲田大学の建築学科という事になりますが、私と理科大とは以前より少なからぬ縁がありまして、3歳年上の兄が理科大の応用化学科に通っていた頃、実家から近い野田キャンパスに何度か連れてきてもらった事があります。あれから15年近く経った今、自分が同じ場所で教職をつとめる事にやはり不思議な縁を感じずにはいられません。

私が大学に入学した1999年は、日本はインターネット黎明期で、テレホーダイの細い回線を深夜の時間帯に根気強く使うような時代でした。受験が終わった解放感と、大学生という自由気ままな身分とから、私も昼夜逆転の生活を長く続けたように思います。ITバブルの恩恵を受けた業界でアルバイトをした事もあり、その業界で職を見つけようと思った時期もありました。

そんな私を建築の世界に戻したのは、大学3年の時に「建築展」に参加したことがきっかけでした。建築に正面からぶつかっていた同期の友人たちとの出会いが、もう一度建築について考える機会を私にくれました。それとともに、私が得意(趣味?)としていた情報技術に関する知識が、建築の世界でも少なからぬ役に立てる事、そこからの視点が建築のあたらしい可能性を引き出せるかも知れないという事を感じたのでした。

それから10年あまりの間、卒業研究、修士論文を経て博士の学位を取るまで、さまざまな研究をする機会に恵まれましたが、いつも「情報」という視点から建築を考えるという立場をとってきました。理科大でも「情報」を軸足にしながら、「防災・安全」という新たなフィールドで研究・教育活動を行っていかうと考えております。

### 心に灯る震災の記憶

大西 直毅 (おおにし なおき)

1982年 大阪生まれ  
2005年 東京大学工学部建築学科卒業  
2010年 同大学院工学系研究科建築学専攻博士  
課程修了  
2010年~衣笠研究室助教。専門は耐震工学



「…大音響とともに、希美子は蒲団と一緒に空中に放りあげられた。近くに飛行機が落ちたのか、ダンプカーが家に突っ込んできたのかと思うまもなく、希美子の体は前後左右に大きく揺れた」一宮本輝『森の中の海』の冒頭、兵庫県南部地震の描写です。当時私は大阪に住んでいたもので、あの朝のことは今でも鮮明に覚えています。テレビに映し出される中間層が破壊したビル、屋根しか残っていない木造家屋。何度か行ったことの

ある見慣れた街並みが地震によって一瞬にして壊れてしまったことに、当時中学生だった私は衝撃を受けました。

大学では建築学科に進学しました。入学時には建築への進学は全く考えておらず、ロボット工学や宇宙工学の研究を夢見ていたのですが、進学振分けの際に震災のことを思い出し、悩んだ末の決断でした。自分がやりたいだけの研究ではなく、建物の安全性にかかわる研究をすることで、少しでも人の役に立ちたかったのです。

卒業論文では迷わず耐震工学の研究室を選択し、それから6年間、長周期地震動や構造物と地盤の相互作用、PC鋼棒によりプレキャストコンクリートの柱・梁をアンボンド接合した部分架構実験など、さまざまな研究をさせていただくことができました。また、博士論文では構造物と地盤の動的相互作用の研究のための並列計算プログラムの開発を行い、現在も研究を続けています。

### 恩返し of 気持ちで

小林 謙介 (こばやし けんすけ)

1978年 愛知県生まれ  
2001年 東京理科大学理工学部建築学科卒業、  
2006年 同大学院博士後期課程修了  
2006年 (独)産業技術総合研究所特別研究員  
2010年~井上研究室 助教。産業技術総合研究  
所安全科学研究部門社会とLCA研究  
Gr. 客員研究員



<http://www.rs.noda.tus.ac.jp/~inoue-m2/kensuke/>

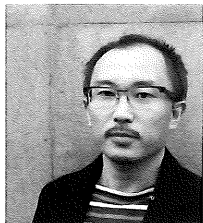
私は、97年に入学以降、学部、修士・博士課程と計9年間、理科大でお世話になりました。博士課程修了後4年間は、(独)産業技術総合研究所(以下、産総研)に勤務しておりましたが、今春より助教として理科大にお世話になることとなりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私の研究テーマは資源循環・環境影響分析です。井上研に配属された学部4年時には、当時実態がほとんど分かっていなかった建築の廃棄物の実態やその環境影響について研究を行ってきました。その後徐々に守備範囲が広まり、資源循環・環境影響評価の研究を行ってきました。産総研では、建築という枠組みではなく、環境という枠組みで、資源循環性や環境影響評価の研究に携わってきました。特に環境への影響を評価する上で用いるライフサイクルアセスメント(LCA)手法に関心を持ち、そのデータベースの研究開発を行いました。現在試行段階にあるカーボンフットプリントで用いられるデータの多くは私たちの成果がもとになっています。

私の関心分野は、当時としては新規のもので、また建築と他分野の境界領域の内容で、教科書や研究室の蓄積のないテーマでした。しかし、ここまでやってくることができたのは、理科大での学生生活があったからこそと思っています。自分が理科大生として得た最も大きな収穫は、基礎学力を身につけ、自分で何か問題意識を持ち、それに向かって調査や分析を行い、試行錯誤しながら解決策を見出すという経験ができたことだと考えています。それによって得られた自信は何にも変えがたいものがあつたと今でも思っています。今後は、理科大の助教として、学生さんたちにこうした経験ができるようサポートすることで恩返しできればと考えています。

# 「OB と語る会」レポート (2010年7月2日)

## 具体的なコト・モノから建築を考える



清水 淳 (しみず じゅん)  
 1969年 埼玉県生まれ  
 1993年 東京理科大学工学部建築学科卒業  
 (堀川研究室)  
 1995年 東京工業大学大学院理工学研究科修士  
 課程修了(坂本研究室)  
 1995年 青木淳建築計画事務所  
 1996年~2001年 長谷川逸子・建築計画工房  
 2002年~清水淳建築設計事務所  
 2005年~京都造形芸術大学非常勤講師

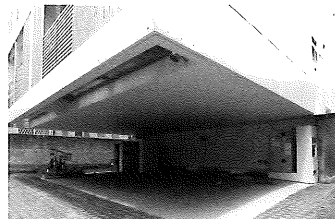
清水氏は、独立されてから手がけられた作品を中心に講演していただきました。

一連のプロジェクトに関する説明は、メタレベルの抽象的な内容というよりは、素材そのものがもつ物性や色彩、また構造や構法、敷地条件といった建築にまつわる具体的な事柄についての内容でした。それは清水氏が講演を通して学生に伝えたい骨子であったと思います。「軽井沢の別荘」に関するスライドでは、設計段階での構造設計者とのやりとりの過程を見せ、構造と意匠の間を行ったり来たりしながら設計が進み、それぞれが抜き差しならないような関係になっていながら、徐々に建築が立ち現れてくるというライブ感が伝わってきました。「都立大学コーポラティブハウス META」では、2.7m 接道の旗竿敷地に車が回転可能な空間をつくり出すために、駐車場部分をキャンティレバーによって無柱としています。特異な断面をもつ特殊解のような建築にも見えますが、敷地がますます細分化され旗竿敷地も少なくない東京の住宅地では、それがあつ汎用性をもった説得力のあるものとなっていました。進行中のプロジェクトである「日本工業大学 18 号館」では、ファサード・スクリーン部分に使用する色を大量の模型によって検討しつつ、モックアップによって実際のガラスの色味、納まりまでを同時に検討していくという方法に、巨視的なものだけでなく、微視的なもの、マテリアルそのものが持つ質を重要視し、それを注意深くコントロールするのだという意思が感じられました。

大学で学生たちを見ていると、コンセプチュアルな建築概念にばかりとらわれ、モノとしての建築を考えることを置き去りにしてしまうことが多いように思います。清水氏は、抽象的なことばかりではなく、マテリアルや構造などの具体的な部分からデザインを考えても、それを突き詰めるうちに見える新たな建築の可能性について示唆してくれたのではないかと思います。

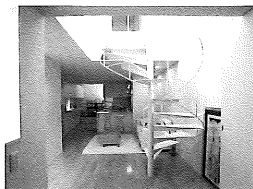
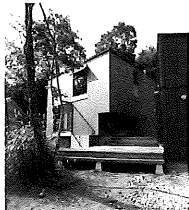


「日本工業大学 18 号館」模型写真



「都立大学のコーポラティブハウス META」外観写真(上)と内観写真(下)

「軽井沢の別荘」外観写真



## 建築的思考、他分野に通ず



小林 直輝 (こばやし なおき)  
 1979年 千葉県生まれ  
 2003年 東京理科大学工学部建築学科卒業  
 (奥田研究室)  
 2003~2006年 電通テック  
 2006~2010年 電通  
 2010年3月~(株)カイリキ代表取締役

小林氏は建築学科を卒業後、電通テックと電通にて、広告に関わる仕事をしてこられ、現在は(株)カイリキを設立し独立されています。冒頭で氏は、プロモーション・プロデューサーという自らの仕事を、「課題を抱えたクライアントの悩みを聞いて、解決策を提案し、それを実行する人」と位置付けました。その仕事内容と建築学科での設計課題との類似点を挙げながら、先の清水氏とは対照的に、建築を外側から照射するという他分野に飛び出した方らしい内容となりました。クリエイティブって何? 建築って他分野にも応用が効くと思いますか? と参加した学生達に向かって問いかけつつ、それに答えるようなかたちで講演は進みました。

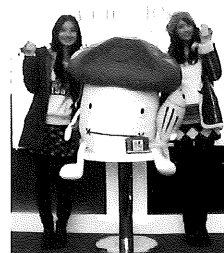
現在の仕事を、1. オーダーを形にする(踊る大捜査線とドコモを組み合わせたキャンペーン)、2. より良い形にする(従来からあるドコモダケというキャラクターをより生かすためのキャンペーン)、3. やりたい事を形にする(空港での海外使用向け携帯電話のキャンペーン)の3パターンに分けて、携帯電話会社ドコモの販促にかかわるプロジェクトを主に話してくださいました。氏の語り口はユーモアたっぷり、広告業界の裏話や、仕事を通しての欲望解放論? も飛び出し、笑いが絶えない場となりましたが、全てのプロジェクトに要求される課題は一問一答の簡単なものではないわけで、からみあう複数の与件を一度に解決するようなアイデアを考えだすことがクリエイティブなのだということ、そしてそれを導きだすための氏の苦労が話の節々から感じられました。

ところで、複数の与件を相手にするといえば、建築のオハコです。建築学生も一年生から設計課題でもまれて、叩き込まれていますから、考える対象が「建築→プロモーション」と変わるだけで、十分に応用が効くのではないかと思います。また氏は、「意見をあれこれと言うだけで、肝心の解決策が出せない人が世の中には多い。一方、建築学科の人たちは、どんな状況下でも何らかアウトプットしなければいけないというトレーニングを積んできているのだから、その強みを生かさなければいけない!」とこれから社会にでていく後輩達に語りかけていました。

(文責 奥田研 助教 中畑昌之)



空港でのキャンペーンの様子



踊る大ドコモ  
 キャンペーン  
 ポスター



合格ドコモダケ  
 イベントの様子

## < 第 21 回 JSCA 賞作品賞受賞作品 >

### 2009 高雄（台湾）ワールドゲームズメインスタジアムの構造設計について

渡邊 秀幸（1984 年卒、88 年院卒）

1962 年 3 月 山梨県富士吉田市生まれ  
1980 年 4 月 東京理科大学理工学部建築学科入学  
1985 年 4 月 富澤研究室研修生  
1986 年 4 月 東京理科大学大学院理工学研究科  
建築学専攻  
1988 年 4 月 竹中工務店入社  
現在 東京本店設計部構造部門グループリーダー



建築家の伊東豊雄氏をリーディングアーキテクトとして迎えた私たち設計チームは、従来の閉鎖的なスタジアムではなく、全く新しい 21 世紀のスタジアムとして高雄スタジアムを提案しました。高雄スタジアムには「オープン・スタジアム」、「アーバン・パーク」、「スパイラル連続体」の 3 つの明解なデザインコンセプトが展開されています。3 つのデザインコンセプトを具現化する上で、私たちはシンプルな構造計画により表現される繰り返しの合理性と美しさを追求することを第一の方針としました。

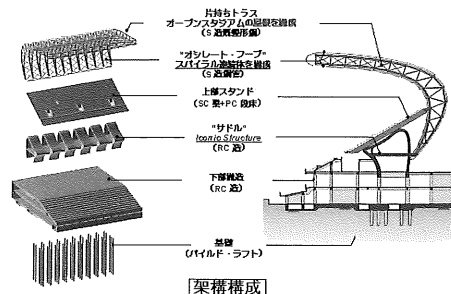
まず緩やかな三次元曲面をなす「オープン・スタジアム」の屋根形状に対して、主架構は鉛直切断面が 30 m ~ 40 m 長さのブーメラン形状の片持ちトラスとし、屋根全体に渡り一様に並列配置しました。「スパイラル連続体」は 32 本の連なる多重螺旋のオシレート・フープ（318.5 φ の鋼管）で構成し、全てのトラス節点を通して屋根全体に連続させ、面内ブレースとして片持ちトラス群を一体化し安定させました。屋根上面のオシレート・フープはソーラーパネルユニットの支持部材に兼用し、間

隔を 2.5 m ~ 3.3 m にすることで小梁などの二次部材を不要としました。このピッチに対応する片持ちトラスの間隔は約 5.5 m とやや密となりますが、その分トラスの各部材断面が押しえられオシレート・フープが視覚的に強調されています。このように、屋根構造の機能を「片持ちトラス」と「オシレート・フープ」の 2 要素に明解に集約し、構造的に最小限の部材構成とすることで軽快かつファサードとしての有機的機能も合わせた屋根架構が出来たと感じています。

屋根架構を支持するのは、曲面的な RC 造の「サドル」と直線的な SC 梁の上部スタンドとなります。これらは形状も材料も異なるエレメントとなりますが、断面的には 4 点のみで結合することで明解な架構構成としました。基礎構造は、重量分布に応じて「サドル」直下にのみ PC 杭を配置したパイルド・ラフト基礎を採用し、建設地の地盤特性を有効に活用した合理的な基礎計画としています。

以上のように、高雄スタジアムは各エレメントの役割を整理しシンプルな架構構成でそれらを周方向に繰り返して連続させて全体の架構を構成しています。これによってリズムカルな美しさと連続性が強調され、デザインコンセプトを実現できたのではないかと考えています。

最後に、学生時代の恩師であります富澤先生（理科大名誉教授）の大変厳しいご指導があってこそ、今日の私のエンジニアリング能力が築けたものと確信しています。富澤先生、大変ありがとうございました。



#### 理科大 OB の交流組織を紹介します

千葉 利宏 1984 年卒

東京理科大学には様々な OB 組織があって活動しています。今年春に、ある会合で自動車ディーラー、ヤナセの拠点開発室マネージャーをされている野田建築会の齊藤和明氏（1976 年卒、三浦研）と知り合い、2 つの OB 会組織を紹介していただき、会合に参加してみました。

2006 年 4 月に理科大卒業生の交流の場として手弁当で発足したのが「からくり会」（<http://members.jcom.home.ne.jp/riso-saitama2/karakuri.html>）です。毎月 1 回、神楽坂にある理窓会館で月例会が開催されており、4 月 1 日の例会ではソニー生命保険のライフプランナーである望月克巳氏（1983 理工・応生）が講演したあと、40 人前後の理科大 OB で懇親会が行われました。

1980 年にビジネス界で活躍している理科大 OB によって発足した理窓企業人会が、2010 年 1 月から「理窓ビジネス同友会」（<http://kigyuu.risou.net/>）に名称変更して活動しています。定例懇親会、理窓技術士会懇話会、ビジネス支援相談室などを開催しています。

理窓ビジネス同友会の会長は、日用雑貨品などの輸入販売会社、L&COZY 社長の宮川公治氏（1973 工・経工）、副会長は島崎製作所社長の島崎益男氏（1970 工・機械）、理科大学生食堂の運営会社、神楽サービス社長の坂部三司氏（1974 工・経工）、メガネドラッグ社長の森野義男氏（1978 理・化）の 3 氏です。4 月 13 日に開催された定例懇親会には、野田建築会から齊藤氏のほかに、五洋建設建築営業本部の山崎慶太氏（1997 年卒、井上研）が参加しました。

2006 年から毎年 10 月下旬に開催される大イベント「東京理科大学ホームカミングデー（HCD）in 神楽坂キャンパス」（<http://www.risoukai-hcd.jp/>）にも、多くの同窓生が参加します。HCD に合わせて卒業後 20 年、30 年、40 年卒懇親会、卒業後 50 年祝賀懇親会が開催されるようになりました。このイベントを立ち上げたのは、大学時代に千葉と下宿が同じで、アサツーディ・ケー（ADK）から日本パブリックリレーションズ協会事務局長に就任中の大原寿一氏（1981 理工・経工）です。

# 武田仁教授 最終講義と退任記念懇親会

瀬沼 央 1978年卒

武田仁教授が、2010年3月31日付で退任されました。武田先生は、早稲田大学、東京大学博士課程修了後、1972年4月に東京理科大学理工学部建築学科講師に就任され、38年間に亘り建築環境工学の分野において研究・教育活動を通じ、多くの成果を上げられると共に人材の育成に貢献されました。先生の長きに亘るご尽力とご功績への敬意と今後のご活躍を祈念して「最終講義と退任記念懇親会」を下記の通り開催しました。

日時：2010年3月13日（土曜日）15：30～19：30

会場：六本木ヒルズ 40階アカデミーヒルズ

全国から160名の武田研卒業生が出席し、前半は武田先生の長年に亘る研究業績を中心とした最終講義が行われ、後半は別室で退任記念懇親会を行いました。

発起人代表の挨拶（瀬沼 S.53）、卒業生祝辞（岩浪 S.51、永村 S.55）、記念出版物の紹介（秋山 H.10）、花束・記念品贈呈（吉田 H.19、稗田 H.18）、武田先生ご挨拶、乾杯（佐藤 S.51）、ご来賓祝辞（吉澤先生、大塚先生）、卒業生の言葉（藤田 S.46、鈴木 S.57、岩田 S.59、山下 S.61、大濱 H.5、井上 H.12）と続き、大いに盛り上がりました。

なお、会場で全員に配布された記念出版物「温熱環境卒研生とともに38年」は、武田研卒業生の手で作り上げることをコンセプトに卒業生からの「武田先生の退任によせて」と題して集めた思い出や懐かしい出来事等の原稿、当時の写真と武田先生の日本建築学会関連の論文により構成しています。



東京理科大学理工学部建築学科 武田仁教授 最終講義と退任記念懇親会  
平成22年3月13日 於 六本木アカデミーヒルズ

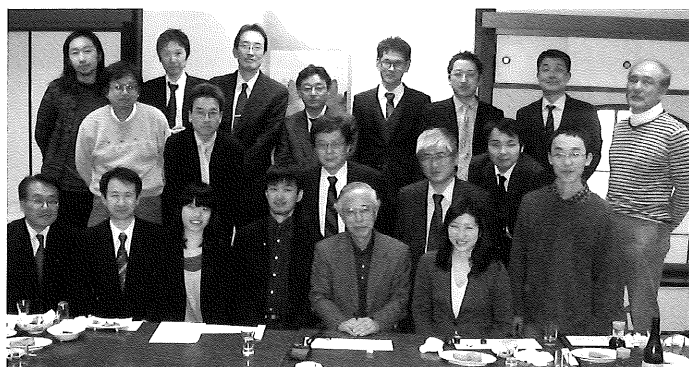
## 井口道雄先生を囲む会

2010年3月12日（金）に新宿栄寿司西口店にて、井口研究室OB会「井口道雄先生を囲む会」が行われました。先生の最終講義・退職記念パーティーが2008年3月に行われて2年が経ち、先生や研究室OBの方々からの近況報告や懐かしい話が和気あいあいとなされました。

井口先生はご自宅から1kmほど離れた東京都名勝「哲学堂公園」近辺の事務所を拠点に、今までの資料整理をしながら研究活動を継続されているとのことでした。また、このたびの会では、井口先生の退職後、井口研究室のあった場所に入られた永野正行先生にもご参加いただき、今後も両研究室の交流を続けたいとのことでした。

今回の会も、皆さんに会えることを楽しみに開催したいと思います。

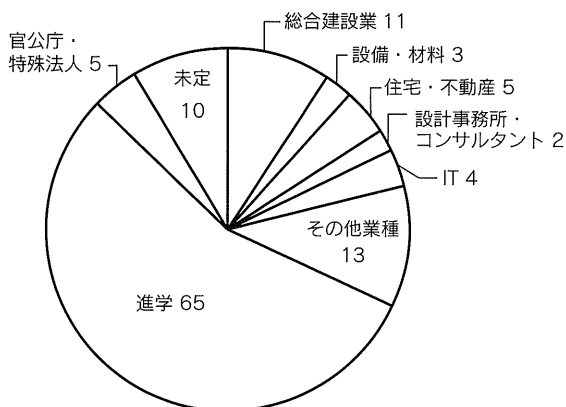
（井口研究室OB会事務局 涌井栄治 S.60年卒、佐藤利昭 H.17年卒）



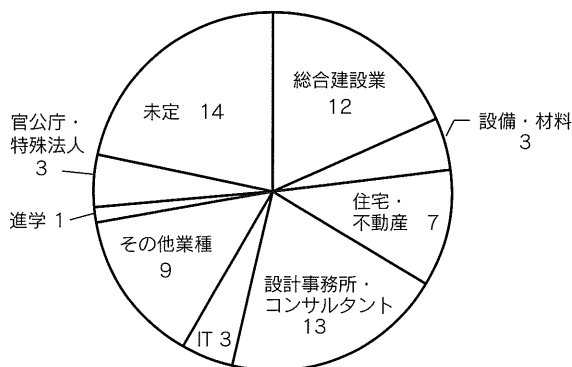
<井口研OB会出席者名簿>（卒業年次順）  
井口先生、永野先生、今井俊夫（S47）、久郷寛芳（同）、星野文男（S49）、飯酒飯茂幸（S52）、上原修（S55）、葛見久光（同）、竹田将夫（同）、市野雅之（S60）、涌井栄治（同）、加藤泰正（S62）、池田竜介（H2）、木田英範（H8）、石川智美（H16）、平嶋しえな（同）、川島学（H17）、佐藤利昭（同）、羽二生信之（H19）、小山哲央（H22 永野研卒）

## 2009年度卒業生の就職先など内定先

学部卒業生（118名）



大学院修了生（65名）



# 2009 年度 NAA 賞は初見研の町田裕代さんに

毎年恒例の NAA 賞は、初見研究室の町田裕代さんに授与されました。受賞理由は下記の通りです。

「町田裕代さんの卒業研究のタイトルは『フランスのボルドー近郊における農業従事者のライフスタイル』である。この研究を遂行するにあたり、町田さんはフランスボルドーに1年間住み、実際に農業に取り組みながら調査・分析を行った。困難な課題に対して果敢に取り組む行動力にあふれる研究スタイルはユニークであり、今後の活躍が楽しみである。町田裕代さんの卓抜した行動力と熱意（エネルギー）に対し、平成 21 年度 NAA 賞を授与する」

ボルドーから町田さんからお礼のコメントが届きました。

この4年間、私たちが属す一番小さい社会"家族"について大変考えさせられたように思います。

日本の伝統建築に興味があったことから、その内部に住まわれている人の生活に興味が出て、ひよんなことから始めたファームステイ。4年間50家族から学んだことは、常に私にビビりと時にはじわじわと刺激を与えてくれました。

いつの間にか手伝っている農作業に興味は移り、今はフランスはボルドーで夫と開墾して3年目になりました。

卒業論文の調査をきっかけに"知り合い"は"友達"となり、ヒアリング調査中に飲まされ過ぎて倒れたのも、今では村の笑い話になっています。これからも引き続き、社会の原点である"家族"を大切にしながら、そのまわりに重なるたくさんの社会を大切にしていきたいと思っています。

## NAA 賞、ありがとうございました

町田 裕代 (2010 年卒)



今回、NAA 賞を大学生活最後に頂くことができまして、本当に嬉しく思います。ありがとうございました。

大学4年間、常に日本各地の農地へ足を運び、長期休みは殆ど電波の届かないところにいた私を心配していた母を喜ばせることもできました。

これも初見先生をはじめ、小嶋先生、松田さんのご理解とご指導があつてのことと思います。改めてありがとうございました。



## NAA からのお知らせ

### 【会費納入のお願い】

野田建築会 (NAA) では、会則に則って平成 22 年度 (平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日) の普通会員の年会費 3000 円を徴収しています。会費は会報の発行、OB と語る会の開催、NAA サイトの運営、見学会の開催、NAA 賞の授与などの活動費用として有効に使われています。

NAA の発展と活動の活性化を図るために、本年度会費をぜひ、納入いただきますようお願いいたします。つきましては会費納入のための郵便振替用紙を同封いたします。なお、振込み

の時には、封筒の宛名ラベルに記載されている ID 番号を通信欄に記入願います。

### 【NAA サイトのお知らせ】

NAA では、個人情報保護の点から名簿の発行をとりやめましたので、それに代わる情報交換ツールとして NAA サイトを開設しました。サイトに登録すると、大学の動向をお知らせするメールマガジンも届くようになります。ぜひご登録いただくようお願いいたします。

<http://www.rikadaikenchiku.com/>

### 【編集後記】

表紙の写真は、東武野田線の駅から運河を渡ったところに 2009 年に完成した広場「エントランスゲート」です。理科大のシンボルマーク (太陽の重力によって曲がる光の軌道) をデザイン化したとか。写真の奥には運河にかかる歩行者専用橋「ふれあい橋」も見えます。

2011 年 3 月には、奥田宗幸教授、小嶋一浩教授が退任されます。次号で特集を組む予定ですので、両研究室の OB の方はぜひご協力をお願いいたします。OB の方々の情報提供もぜひお願いします。

(千葉利宏: f-planning@mbr.nifty.com)

### 野田建築会 会報 10 秋号

2010 年 10 月 20 日

編集: 会報部会

編集委員: 有岡三恵・小園涼子・佐貫大輔・高安重一・千葉利宏・中畑昌之・前田智成・横山圭 (50 音順)

発行: 東京理科大学野田建築会

〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641

<http://www.rikadaikenchiku.com>

郵便振替 口座番号 00130-9-27644 東京理科大学野田建築会